

の行興月六

文樂座人形浄瑠璃

露披名襲夫太達伊本竹 目代四

日 初 日 一 月 六

幕開時二後午日二・日初

幕開時三後午リヨ目日三

近おで車電・利便御マバ

座 樂 文 橋ツ四



堂 食 一 南 座 樂 文

すで利便御極至ばれば賜命下御に前幕一は用御の事食御



一 南 の き 起 早 番 一 で 阪 大



御宴會にも
御家族連にも
料理は
南 一

大阪四ッ橋

南一温泉料理

文樂座南一食堂

電話南 ⑦
三三三七
三三三〇
四二一一
番番番番

豊満南北新作 山村若榮 振付

三幅對曲輪鞘當

(吉原仲の町の段)

不破と名古屋の頼富の趣向が始めて見たのは元祿十年正月江戸中村座上演の「惠方男夢會名護屋」であらう。その第三番目が頼富の趣向で關十郎の不敵で當時大好評を博した此度豊満南北氏がこれを淨瑠璃化して上演する。その内容は郭の夜櫻は今を盛り、喜見城を眼のあたりの歌樂場へ何れ劣らぬ寛劇出立で通ひくる不破佐左衛門と名古屋山三が遊女の張合ひ。互ひに大道狹しと調歩して腰に差した刀の鞘が當る。あはや喧嘩にならうとする所へ今全盛の葛城太夫が留女に入り圓くおさめる。

國性爺合戦

(樓門の段)
(獅子ヶ城の段)

この床本が書卸されたのは正徳五年十一月一日初日の竹本座で、作者は近松門左衛門。その時の名題は「父は唐土國性爺合戦」でありましてこれより先にこの國性爺を材としたものに信濃様の正本國仙野手柄日記があります。元祿三十四年頃錦文流の作とあります。この狂言は未曽有の大當りをとつて、三年越十七ヶ月間通して興行した名作であります。その後享保二年二月十五日初日で國性爺後日合戦が仍且近松翁の作で上場されました。この時人形遣の名手吉田文二郎が始めて出演し、經錦舎の人形を片手にて出遇大好評を博しました。この時より大幕の上に小幕を引くことが始まりました。これが水引幕の始であります。「樓門の段」は三段目の口で竹本内匠理太夫が初演「獅子ヶ城の段」は三段目の切で初演は竹本政太夫であります。全五段の内この獅子ヶ城は最も有名で歌舞伎でも九代目團十郎の當り藝となつたものです。

紙子仕立兩面鑑

(大文字屋の段)

この淨瑠璃は明和五年十二月北堀江座に初演された當導助の作で上中下三卷八段からなつてゐて、この大文字屋は中巻の切になつてゐます。此の段の内容をお知らせいたしますと、大阪上町での大店萬屋の佐助六は大文字屋からお松といふ貞節な娘を迎へたにも拘らず、新町の遊女揚巻と深く契を交はします。其處へ附込んで、お松は惡妻として居る番頭俵九郎の陰謀によつて新清水の淨無淵で親助右衛門から紙衣一枚で勘當され丹波路へ駈落する。お松は實家の大文字屋へ歸つて居た日夜夫の安否を氣遣つて居るが、お松の兄の榮三郎は律義者で妹に身を賣つて揚巻身請けの金子調達を勧めるので、お松も夫のため喜んで承知する。この一部始終を聞いた親の助右衛門は兩人の誠に感じ揚巻の身代金を出して其の年季證文を持つて大文字屋を訪れるといふ親の慈悲、妻の貞節、義理人情に絡む絶品です。

名筆吃又平

(土佐將監閑居の段)

この淨瑠璃は寶永五年の竹本座上演近松門左衛門作に胚胎し、時代物の中間を行きたる作柄で近松翁野作中の雄篇であります。巨匠土佐將監の弟子修理之介は數條に現はれた虎を繪筆で描出し光澄の苗字を許される。兄弟子の浮世又平は師の不興を蒙り其上愚鈍と食に悶々たる裡にあるが、今この光澄の出世を見るにつけ一層世を夢み今生の思出にと手水鉢に自畫像を畫き一念の通じて師より光起の苗字を許され喜びに大頭舞を女房づれに舞踊ひ、師より大役を仰付かつて勇んで往くといふ好箇の名作であります。

竹本伊達太夫
襲名披露
鶴澤道八 新曲

口上

(二十分)

「連獅子」

「勸進帳」最近では「大森彦七」を作曲した鶴澤道八が更生文樂の爲また長唄「連獅子」を淨曲化し六月興行の床を飾る内容は親獅子に蹴落された仔獅子が猛然と谷間より斷崖を攀登る豪薔梅爛たる繪卷舞臺を上場新振附を特に根茂都陸平が擔當する。

八時四十七分—九時十七分 (幕間 十分)

生寫朝顔日記

(宿屋の段より)
(大井川まで)

此の曲は山田案山子の戯號で近松徳夏が熊澤蕃山の作といへられてゐる。「露の干ぬ間」なる朝顔の小唄を原に想を極え「生寫朝顔日記」として題して、竹本信太夫のために書卸したのであつたが、上演に致らずして文化七年八月病歿した。それを翌年近松柳が「徳夏遺稿朝顔日記」として讀本に刊行したが非常に評判になつたので、天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬はしい人が添作して、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石、船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、小瀬川、麻耶ヶ嶽、濱松、島田宿、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱の五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ、「生寫朝顔日記」であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遺子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し外題の六文字は縁起が悪いと云ふので、「増補生寫朝顔日記」と七字に改題した。それ故に今日流布してゐる正本は此の嘉永三年刊行のものが多い。特に此度新人竹本伊達太夫が美聲にて此段を語る。

九時二十七分—十時二十七分 (幕間 十分)

伊達娘戀緋鹿子

(八百屋お七)
(火見櫓の段)

この淨瑠璃は「潤色江戸紫」を改作して安永二年四月北堀江座に上演されたのが初演で、作者は當導助、松田和吉、若竹雷助でこの段は六段目の切になつてゐる。この内容を申上げますと、吉祥院の小姓吉三郎は故主左門之助が殿から預かつた天國の劔を期日中に探し出せない咎によつて切腹せうとします。吉三郎も殉死をせねばならぬので、豫て契を結んでゐる八百屋お七の許に赴きそれとなく別れを告げよふとして行く。八百屋ではお七の戀慕してゐる武兵衛から少からぬ借金をしてゐるので、お七は因果を含めて無理に武兵衛と夫婦になれと強要します。後下へ忍んでゐた吉三郎はこれを知りてあつて善置を残して出て行きます。後でお七は悔りしたが天國の劔は武兵衛が所持してゐるので策を以てこれを奪ひ吉三郎の命を救ふために、お松が吉三郎の許へ届けやうとしますが、夜中で町には木戸が閉つてゐますので、お七は罪を覺悟で火見櫓に登つて半鐘を鳴らし火事と偽つて木戸を開かせるといふ筋である。

十時三十七分—十時四十七分 (打出 十分)